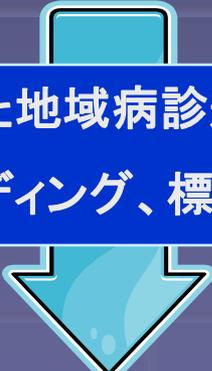


1. 病院情報システムの規格・設計が、医療施設毎に異なっているため、多施設からの情報を集積するためには工夫が必要である。
2. 対象患者の退院・転院、複数医療機関受診等によってデータの継続性が失われる場合がある。
3. 後発医薬品など、成分が同一で商品名が異なる医薬品がある場合、全ての情報を集積・解析するために多くの労力が必要になる。
4. 電子診療録に記載された症状・診断名等の文字情報の網羅的検索が可能な病院情報システムは少ない。したがって、調査対象とする有害事象に関連する情報を、電子診療録のデータベースから機械的に抽出することは困難である。



SS-MIXを始めとした地域病診連携システムの発展
診療録情報のコーディング、標準化システムの発展

今後、技術的に解決されることが期待できる！

- 様々な副作用の発生頻度をより簡便かつ短期間に把握することが可能となる。
 - ◆ 副作用の発現をリアルタイムにモニタリングする
 - ◆ 安全性上の懸念が生じた際の迅速な情報収集
 - ◆ 安全対策における措置の効果を迅速に評価

- 副作用の発生に影響を及ぼす要因を疫学的に解析することが可能となる。
 - ◆ 医薬品の適正使用に資する情報の提供

- 有効性に関するアウトカムの調査により、臨床使用実態におけるリスク&ベネフィットを評価できる可能性もある。